

人口特性からみた地方町と地方中心都市との比較

小野寺 雅 裕

1. は じ め に

地域を対象として総合的にみる場合、諸々の現象が集約されているという点から、人口を指標とすることが最も有効な手段であると考えられる。本稿では、いくつかの人口特性をもとに“地方町”の性格をとらえていきたいと思う。地方町に主眼を置くのは、人口を扱う研究の多くは都市や過疎農村を対象としており、数のうえではかなり多い地方町はあまりとりあげられていないためである。

本来の主旨からいえば、複数の対象地域から一般化へ導かなければならないのであるが、諸々の理由により、一例として岩手県一戸町をとりあげた。さらに本稿では、地方町の変化を特徴づけるため、地方中心都市である盛岡市と比較しながら論をすすめてゆく。

なお用いた資料は比較するうえで同一条件のものが必要があるため、主に「国勢調査報告」から用いている。

2. 対象地域の概観

一戸町は岩手県北部に位置し、二戸郡に属しており、東を北上山地、西を奥羽山脈に囲まれた盆地にある。中心集落は町内を北流する馬淵川の形成した段丘上にのるかたちとなっており、おおよそ馬淵川に平行して南北に貫く国道4号線に依存する街村型の形態をとっている。

明治22年の町村制施行によって19村が一戸町、浪打村、鳥海村、小鳥谷村、姉帯村に統合され、昭和32年にこの5町村が合併し、現在の町域が確定した。

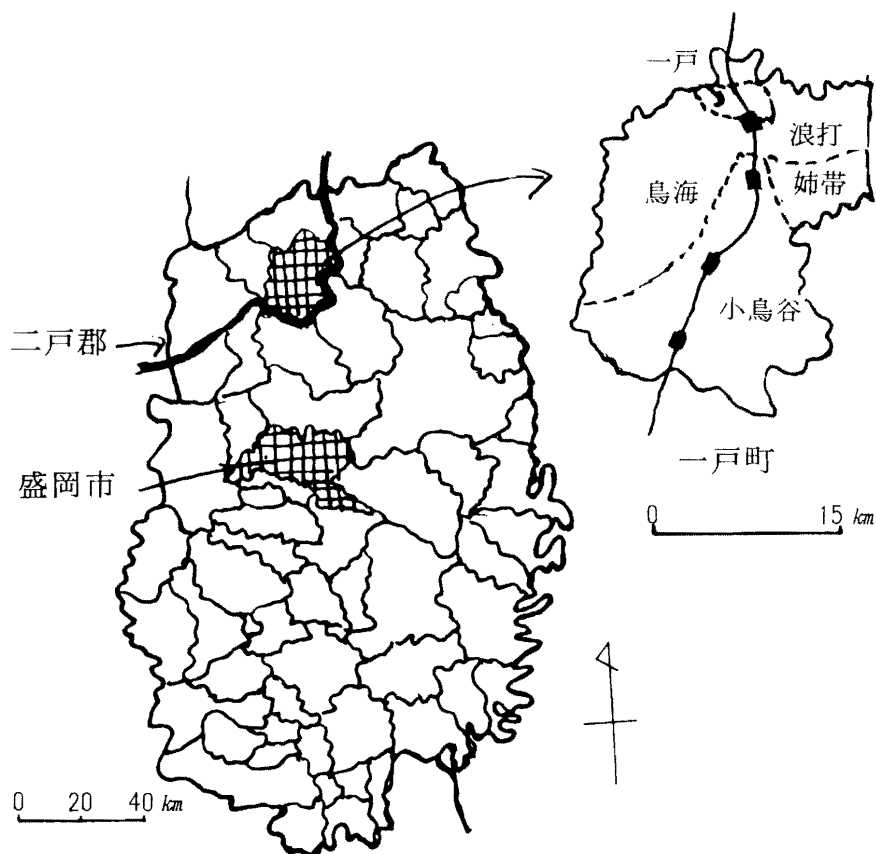
米作のほか、野菜や工芸作物といった畑作、畜産もさかんであり、農業を中心とする農村的性格の強い町である。

一方盛岡市は岩手県の県庁所在地であり、行政のほか教育、文化、経済、交通の中心として、その機能の一部は県域を越えて北東北3県まで広がっており、まさに地方における中心都市であるといえる。

現在の市域が確定したのは昭和30年になってからで、西部の旧市域周辺がD I Dとして市の中心地区となっている。(第1図)

3. 両地域の比較

国勢調査年次での総人口推移をみると、増加を続ける盛岡市と、昭和30年を境界として減少に転じている一戸町とは、対照的な変化をみせている。一戸町内部においても、山間部ほど減少が著しい。これは高度経済成長によるものであり、人口吸引地域と供給地域との性格を顕著にあらわして



第1図 対象地域の位置図

いる。(第2図)

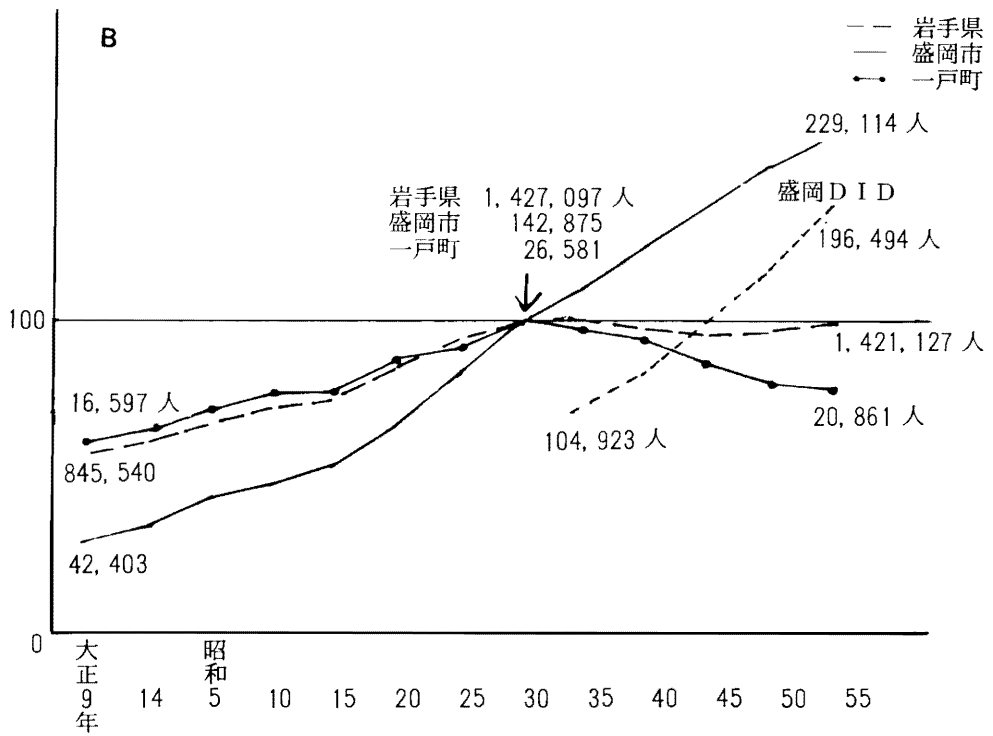
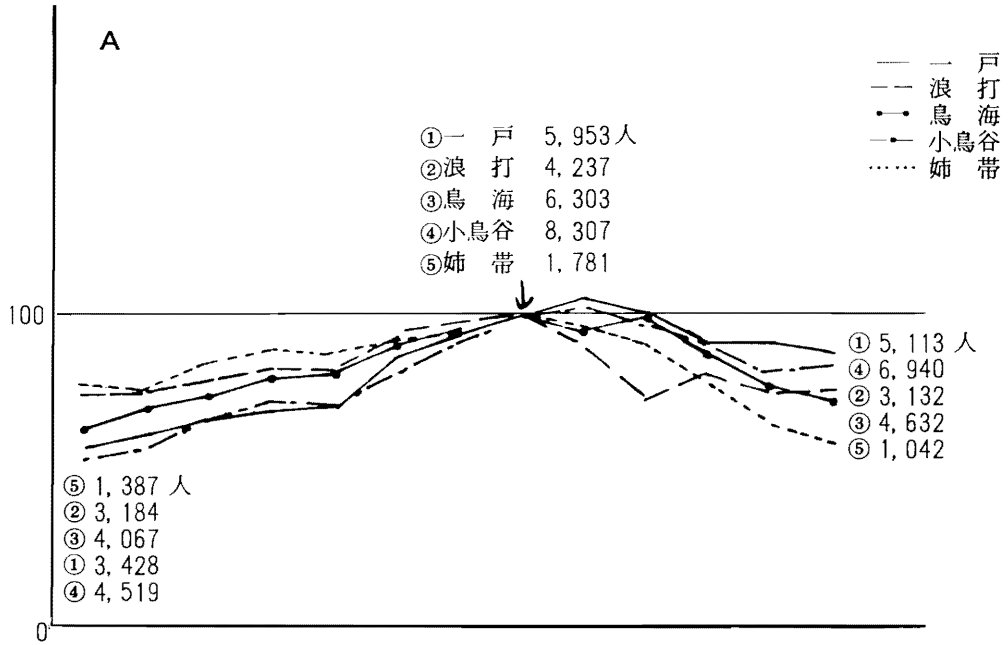
こうした人口増減は自然増と社会増との兼合いによるものであって、特に再生産年齢層の厚さに関係している。(第3図)

世帯数の変化も高度経済成長の影響をみせているが、それに伴い核家族化の進行もうかがえる。しかし後述する年齢別構成の違いもあって、世帯構成に差が生じており、1世帯当り人員に約1人の差があらわれている。

以上みてきたように、一戸町においてみられる変化はそのまま人口密度の変化にもあらわれており、一戸地区を中心とする現在の地域構造がうかがえる。また盛岡市では、近年において特に顕著なD I D外への移動をうかがい知ることができる。

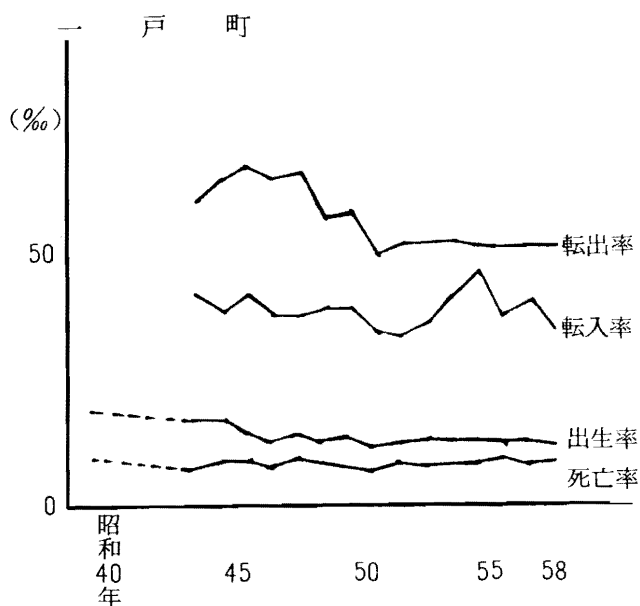
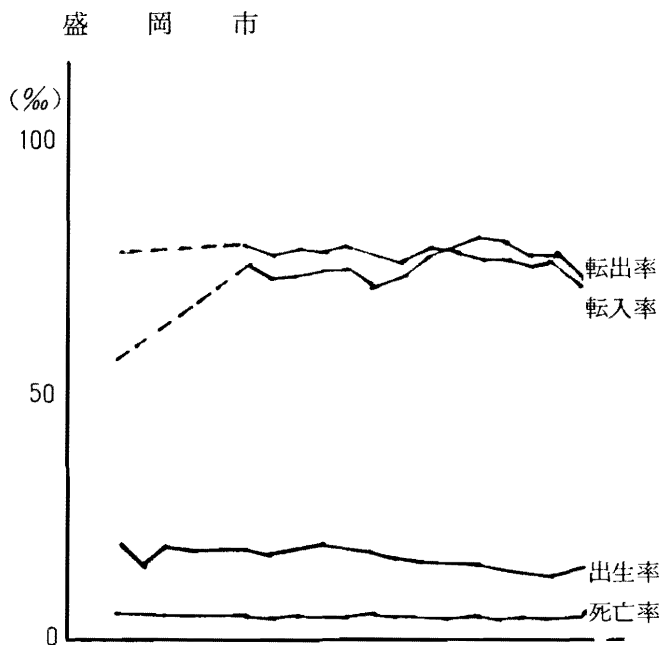
次に人口構造について検討してゆく。

年齢別構成では、やはり高度経済成長を契機にその様相が変化している。昭和25年時点では盛岡市、一戸町とも、おおよそピラミッド型をしているといえるが、昭和55年には、盛岡市では生産年齢層を吸収して都市型の様相を呈すようになり、逆に一戸町は同じ生年齢層の減少により農村型



第2図 総人口推移

※ 昭和30年の人口数を100とする (「国勢調査報告」より作成)



第3図 人口動態

※ 昭和41～44年までのデータの得られなかった部分は破線で表わしている。

(「盛岡市統計書」「戸町住民基本台帳」より作成)

を示している。このような変化により、特に戸町での高齢化の進行には著しいものがある。

年齢別人口構成で特徴的なのは、昭和55年に戸町においてみられる男子25～29才層の増加である。明らかに他市町村からの流入によるものであり、それをうながしたのは、同じ時期に着手している様々な道路整備工事等の影響であり、後述の産業別人口がそれを裏づけている。

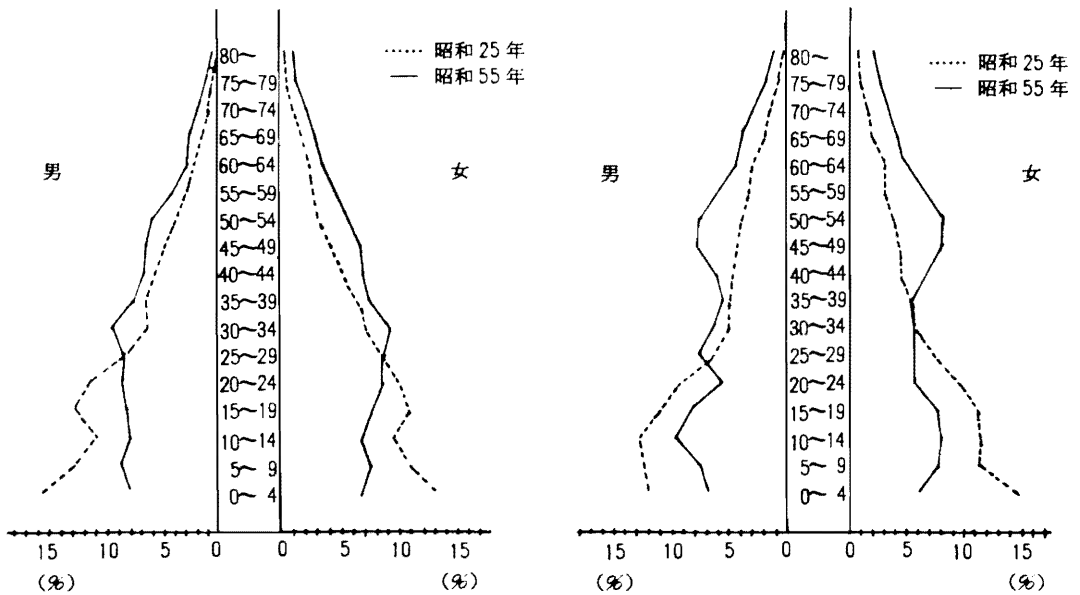
(第4図)

その産業別人口をみると、盛岡市では第3次産業が、戸町では第1次産業(主に農業)が基幹産業となっていることが明確である。(第5図)しかし、第1次産業では減少が著しく、第3次産業では増加が高いという傾向は、戸町、盛岡市に共通してみられる。それぞれについて年齢別にもみてみたが、第1次産業では若い年齢層の減少が著しく、高齢化が激しいことが戸町、盛岡市ともにいえる。また第3次産業では、若い年齢層で高い割合を占めていることは共通するが、この産業の多くを占めているサービス・小売業が、戸町においては家族共同体で営まれている場合が多いため、中高年齢層での割合も高くなっている。

一方第2次産業は横バイ状態にある盛岡市に対し、戸町では高い増加をみせており、特に昭和50～55年において顕著である。これは先述

盛岡市

一戸町



総数(人)	男	女	計
昭和25年	57,666	59,912	117,578
昭和55年	110,627	118,487	229,114

総数(人)	男	女	計
昭和25年	12,474	12,599	25,073
昭和55年	10,008	10,853	20,861

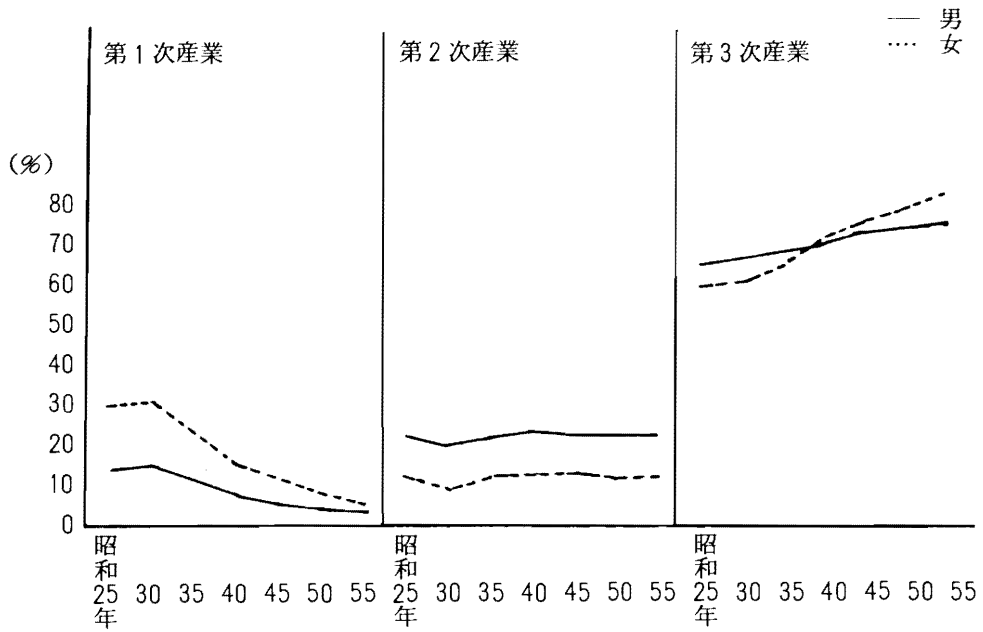
第4図 年齢別人口構成

(「国勢調査報告」より作成)

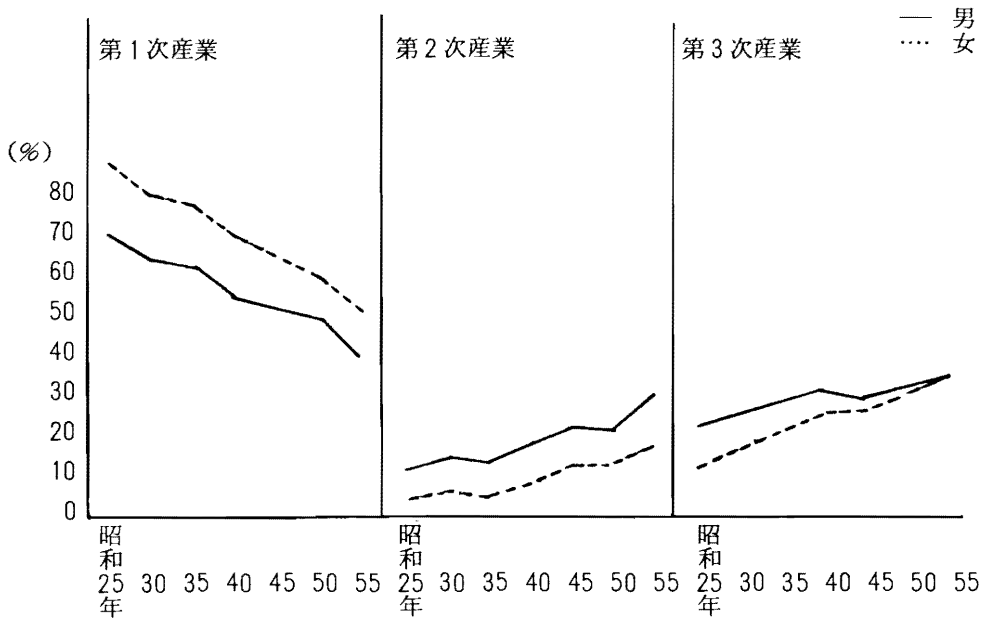
した建設業就業者の流入によるところが大きい。

最後に常住地、従業地をもとにした流入人口によって、他市町村との関係を調べてみた。(第6図)それによると、盛岡市では流入人口が流出人口を大きく上回っている。多くは北西の滝沢村、南の都南村、紫波町、北の玉山村からであり、特に滝沢村、都南村はベッドタウンとして住宅化がすすんでいる。しかし流出も多くがこれらの町村に集中しており、盛岡市のD I Dが市境界を越えて拡大していることを考慮すると、滝沢村、都南村は盛岡市との一体化が進んでいるといえるであろう。

盛岡市



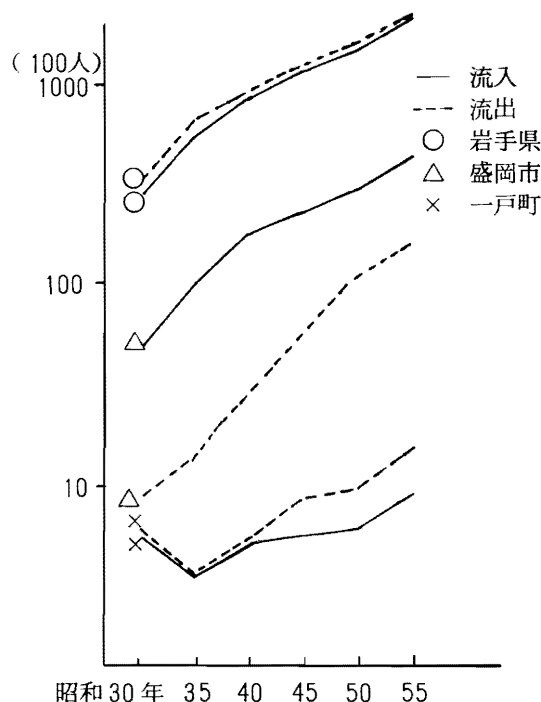
一戸町



第5図 産業別人口構成

(「国勢調査報告」より作成)

一戸町では盛岡市と逆に、流出人口が流入人口を上回っている。多くは二戸市に集中しており、流入も二戸市からのものが多い。しかしその他安代町、浄法寺町などの周辺地域からも集めている。このことから、一戸町は二戸市にやや依存しているかたちをとりながら、二戸地区の中心のひとつとして位置づけることができる。また盛岡市を従業地とする者も年々増えており、盛岡市の中心性の拡大をうかがうことができる。



第6図 流出入人口の変化

(「国勢調査報告」より作成)

4. ま と め

1. 高度経済成長期を経験することによって、盛岡市は人口吸引地域として、一戸町は供給地域としての性格を強く出すようになった。
2. 一戸町内部においては一戸地区が中心となっており、姉帯地区は逆に最も過疎化が進んでいる。
3. 人口動態の面では、一戸町と盛岡市は互いに逆の傾向を示しており、特に若い年齢層において顕著である。
4. 一戸町では減少してはいるものの、依然として農業が基幹産業となっている。
5. 特に昭和50～55年にかけて、一戸町では男子25～29才層の流入がみられた。これは建設業従業者によるところが大きく、構成比では第2次産業の著しい増加をもたらした。
6. 一戸町は北に接する二戸市との関連が特に強い。近年においては盛岡市の機能拡大もあって、盛岡市との関係が強くなってきている。

5. 展望（一戸町の今後について）

現状としては、人口減少を続けてきた一戸町にも歯止めがかかりつつある状態であるといえるであろう。しかしこれが増加へと好転してゆくとは考えられない。また内部的にみても、第1次産業の減少分がそのまま第2次、第3次産業へ流れてゆくとはとらえがたい。したがって、減少人口の主体をなす若年齢層をいかにしてとどめるか、ということが行政側の問題となってくるであろう。

それがそのまま高齢化への対応につながってくると思われる。

一戸町の人口特性に変化を与えられる要因として、現段階では、計画中のスポーツ施設の建設、東北自動車道や盛岡以北の東北新幹線の開通等があげられる。その変化がプラスとなるかマイナスとなるか、現段階では推測しがたいが、よい意味での転機となることを期待したい。

本稿を作成するにあたり御指導下さった水野先生、後藤先生、資料を御提供下さり御助言を下さった盛岡市役所、一戸町役場の方々に厚く御礼申し上げます。

【参考資料・文献】

- 総理府統計局：昭和5～15，25～55年 国勢調査報告 一岩手県一
昭和30～55年 国勢調査報告 一従業地，通学地一
- 盛岡市総務部企画調査課：盛岡市統計シリーズ その1，7
- 一戸町：昭和44，46～47，54～58年度版 一戸町々勢要覧
- 一戸町（1982）：一戸町誌上巻
- 館 稔（1963）：人口分析の方法 古今書院 281頁
- 近江哲男（1967）：地方都市の人口抑止条件 都市問題 58—8，61～81
58—10，82～101
- 上野 登（1983）：過疎化を岐ける二地域考察 都市問題 74—3，64～77
- 宮崎禮次郎（1984）：秋田県過疎地域の人口変動と将来推計 東北地理 36—1，62～67